夏ダイコンに重大な被害を与える キスジノミハムシの対策

夏ダイコン産地（郡上市高鷲町）では、近年キスジノミハムシが多発し、根部食害による品質低下や出荷量の減少が問題となっています。そこで、当産地における多発要因を明らかにし、発生密度を低下させる方法を検討しました。また、本虫に対して効果の高い薬剤を選定し、多発生時にも被害を抑制可能な体系防除を検討しました。

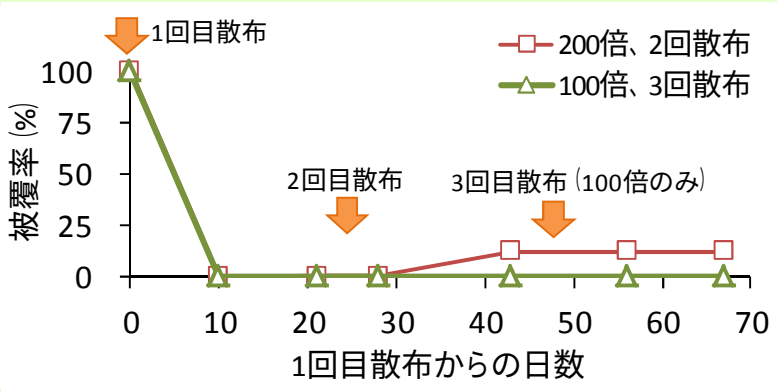
キスジノミハムシの多発要因

キレハイヌガラシ群落

キスジノミハムシ

キレハイヌガラシで増殖した成虫が飛来し、幼虫が加害

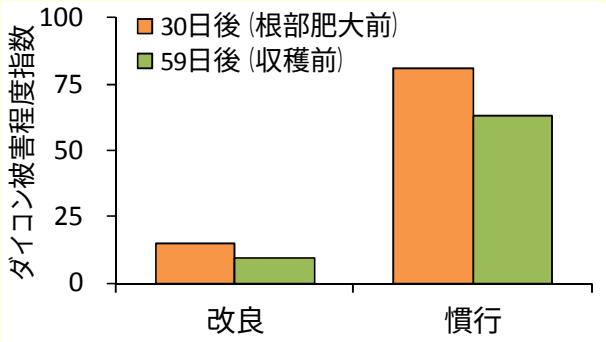
被害多発



グリホサートカリウム塩によるキレハイヌガラシの除草効果

根部を枯らす能力の高い除草剤を用いることで、除草可能です

多発時における体系防除



体系防除による被害抑制効果

試験区	土壌処理剤	散布剤（1週間間隔）
改良区	テフルトリン（播溝処理）	成虫の寄生や食害を抑制する剤（トルフェンピラド、カルタップなど）
慣行区	上に同じ	慣行的に使われている有機リン剤

改良区は、多発条件下でも被害を抑制できます

（研究成果）

- 産地内にキレハイヌガラシ（アブラナ科雑草）が群落を形成しており、キスジノミハムシの発生源になっていました。
- 本雑草は再生力が強いため、根部を枯らす除草剤を高濃度・複数回散布して、本虫の発生量を減らすことが重要です。
- 多発条件下では、テフルトリン粒剤と成虫の寄生や食害を抑制する散布剤を、生育初期から1週間間隔で散布することで、被害を抑制できます。

（岐阜県農業技術センター　環境部）